日本ミステリ・シリーズ

6

翳ある墓標

鮎川哲也

早川書房

主要著書

「黒いトランク」（講談社刊）
「黒い白鳥」（講談社刊）
「憎悪の化石」（講談社刊）
「人それを情死と呼ぶ」（東都書房刊）

第六回配本　定価三四〇円

駿（かげ）ある墓標
日本ミステリ・シリーズ　第六巻

昭和三七年七月二五日　印刷
昭和三七年七月三一日　発行

著者　鮎川哲也
発行者　早川清
印刷者　堀内文治郎

発行所　早川書房
東京都千代田区神田多町二〜二
電話　東京（291）3254・1（代）・3（代）
（291）3252〜8（編集）

用紙・四国製紙KK／クロース・日本クロースKK／印刷・KK堀内印刷／製本・堅省堂

翳（かげ）ある墓標

目　次

一　ひふみという女……五
二　失踪……三一
三　鐘の音に胸ふたぎ……五六
四　謎の文字……九八
五　黒くて毛深いもの……一三八
六　動機の発見……一六六

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongb

七　犯人ではあり得ない……一九八
八　カードの論理……二三五
九　遠い声……二七六
作者のことば……三〇五

箱・カット　小玉光雄

一　ひふみという女

1

キャバレをでて有楽町の駅のほうへ歩きながら、ふたりの女は肩をくっつけるようにして、どこの中華料理がうまいとか、どこの店の婦人靴がやすいとか、男性にとっては少しも面白くない話題に熱中していた。仲間はずれにされたことを杉田はむしろ幸いにして、せまい歩道の上を、おなじ方向にながれていく他の女たちの上に、デパートの高級家具売り場をひやかすときのような視線をなげていた。気に入った女がいることはいるが、自分のサラリイではとうてい手がでないといった、羨望とあきらめの目である。

この時刻になると、銀座から新橋や有楽町の駅へつうじる道は、キャバレやバーの女たちでいっぱいにあふれるのが毎夜のことだった。洋服を着たの、和服を着たの、やせた女、肉感的な女、つれ立ってお喋りに夢中なの、独りぼっちで足早やなの。彼女らに共通しているのは、ボッ

クスに坐って客の相手をしているときには例外なく美人にみえたのが、ドレスをぬいで自前の通勤服に着かえてしまうと、例外なく疲れきった不健康な様子にみえることだった。赤やみどりのネオンの下にさしかかると、その毒々しい光をあびた鼻や頬と、くらい隈になった目やおとがいが、彼女らの顔をいっそう疲れはてたようにみせた。

トップ屋というおれの商売もしんどいけれど、ホステス稼業もらくじゃないとみえるな……。杉田はそのようなことを思い、すぐに一転して、これらの女の何パーセントがパトロン持ちなのだろうかと考えていた。

数寄屋橋は消滅して、いまは西銀座という散文的な名にかわっている。その西銀座をわたると、女の列は劇場の手前から右折し、駅への近道をとるのである。寒空に高くかかげられた絵看板のはだかの踊り子は、昼間みたときとは違って、ピンク色に鳥肌だっているようだった。

「杉田さん、ちょっと待っててよ」

映子の声に、杉田は思わず足をとめた。その拍子に、うしろを歩いていた女が彼の背中にどんとつき当って、舌打ちをしてすりぬけていった。

「どうしたんだい」

「あれよ」

白い歯をみせて彼女が言った。細い路地を入ったところに、石焼き芋の屋台がでている。ローソクのほのあかりに、ハンチングをかぶった芋屋のおやじの顔がうかんでいた。

「買うのかい？」

「だって、おなかがすいているんですもの」
手袋をはめた小さな手で、映子は胃のあたりをおさえて答えた。
この夜、杉田と映子は記事をとる目的で、ある男とインタビューをした。相手を多弁にするために、彼が好きだというキャバレに招待して、そこのはなやいだ雰囲気のなかで対談をやり、かなりの収穫を得たのである。
「まさかインタビューの最中にたべるわけにはいかないでしょ。あたし空腹で目がまわりそうだったのよ」
「ここで待っててやる。早くいってこいよ」
杉田が言った。両手をポケットにつっこみ、ソフトをあみだにかぶって、どこかくずれた匂いのするポーズだった。
映子と、今夜のホステスだったひふみとは、小走りに路地のなかへかけこんだ。ひふみの白のハイヒールが夜目にもはっきりと躍動してみえた。
杉田を待たせておいて、女たちは本性である図々しさを発揮した。夜風のなかに彼を立たせたまま、好物の焼き芋を、五分ちかくかかってしこたま平げた。
出てきたとき、映子もひふみもハンカチで唇をふいていた。
「わるかったわね、待たせちゃって」
「ふむ、そうやって済ました顔をすると、どう見たっていま芋を喰ったとは思えないよ。女っちゃこわいね」

「なに言ってるのよ、いま知ったわけじゃないのにさ。ひふみさん、杉田さんたらまだ独身なの。女がこわくて結婚に踏みきれないんですって」
「あら」
「臆病なのよ、つまるところ。そのうち蠻が立って、だれからも相手にされなくなるから見てて ご覧なさいな」
ひとしきり女たちは杉田の棚おろしをやり、杉田はながい顔に苦笑をうかべて、あらぬかたを眺めていた。高森映子の毒舌には、彼ばかりでなく、編集部のだれもが慣れていたのだ。意地のわるい、しんねりむっつりした悪口とちがった映子の言葉には、トゲがなかったからである。
駅の前までやってくると、ひふみは急に足をとめ、ここで別れると言いだした。三人とも住居は山手線の沿線にある。一緒にかえるつもりでいた映子は、ハンドバッグをかかえなおして、意外そうに相手をみた。
「どうしたのよ、急に」
「思いだしたことがあるの、ここで失礼するわ」
ミンクまがいの人造毛皮のオーバーに身をくるみ、上体をよじって、ちょっとしなをつくるようにして杉田をみた。卵に目鼻をつけたような日本的な顔立だが、均斉のとれたからだをしているせいか洋服がよく似合う。キャバレでドレスを着ていたときも、いまこうして立っているオーバーを着た姿からも、杉田はおなじ印象をうけた。
「そう、それじゃまたね。久しぶりで随分たのしい思いをしたわ」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongb

映子は察したように答え、それにつづけてふたりは、女同士のあのいたわりに満ちた、社交用の挨拶をかわした。
「杉田さんも」
と、ひふみは水商売の女らしく、如才なく名をおぼえていて呼んだ。
「またいらして下さいね」
「ええ、ぜひともね。今夜は愉快でした」
「あたしがいなかったら、もっとね」
快活に映子がまぜかえした。
ひふみと別れて、二人はふたたび女のなかに身を投じた。改札口をぬけ、階段をのぼってフォームに上ったとき、映子ははじめて口をひらいた。
「いい人でしょ」
「ああ、感じがいいね。ちょっと淋しいかげをみせるときがあるけど」
杉田は思ったまま言った。女がいい人でしょうと言って返答をもとめる場合、その多くが反語であった。自分の言葉に反対してくれることを、言外にもとめているのである。うっかりした返事をして、あとで手痛い目にあったおぼえが杉田には何回かあった。だが映子の場合はそうした配慮は無用なのだ。彼女が同性をほめるときには、しんからそう思い、そして相手の同感を期待しているのである。
「高校時代は優等生だったのよ。同級生はみな、ひふみさんがいちばん幸福な人生をおくるもの

と思っていたわ。善人だし……」
「ふむ」
「でも、運命ってわからない。旦那さんは結核で亡くなるし、ひとり残った子供さんは日本脳炎で死んでしまうし……。いまでは、あたしのほうがずっと幸福だわ」
「ま、きみも早いとこ旦那をもらうんだな。そうすりゃもっと幸福になるさ」
「言われなくったってもらうわよ」
「だからさ、早くしろと忠告してやっているんだよ。結婚がおそくなればなるほど、乳癌になる率がたかいんだってさ」
「あら、どうして?」
「そいつは知らない。知っていたって、こんな人なかでは言えないさ。だが、その点おとこは気が楽だよ。いくらオールドボーイになろうとも、乳癌になる心配だけはないからね」
「あら、あんな呑気なこと言ってる。男性だってなるのよ。殊にお酒呑みがあぶないんだから」
おどかすように、映子は横目で彼を見た。
杉田はオーバーのポケットに両手をつっこんだままだった。そこには今夜の対談の要点筆記をしたメモが入っている。落したりすられたりしては一大事だ。冗談を言いながらも、左手の指はメモのたばを握りしめていた。
「おそいわね。どうしたのかしら」
会話に飽いたように、小さくあくびを嚙み殺した映子は、マフラのあたりに手をやってフォー

ムの時計をかえりみた。針は零時二十分をさそうとしている。改札口をとおってからすでに十分ちかくたっていた。

2

杉田兼助がつとめているトップ屋集団〝メトロ取材グループ〟は、神田駅のすぐ近所にある。都電通りに面して、このあたりでは一等地ではあったが、ふたつのビルの間にはさまれて冬は陽あたりがわるく、夏は風とおしがよくなかった。今度の夏はルームクーラーを、そしてつぎの冬にはヒーターをそなえつけようというのが、編集長以下の一致した希望である。それはともかく、日中でもちょっと雲のある日には、天井の螢光灯をつけなくてはならなかった。

その日、杉田と映子は机に向き合って、昨日のメモをもとに、三十枚の会見記を書き上げていた。映子はふつうの週刊誌から注文がきているのだが、杉田のほうはそれをくだけた興味中心の読み物にした上で、さらに通俗読者むけの週刊誌に売りこまなくてはならなかった。

「くたびれたな。アミダでもやらないか」

「三人きりしかいないじゃないの。だめだわよ」

編集室のなかを見まわしてから、映子はつまらなさそうに言った。同僚たちはみな仕事にでかけており、のこっているのは編集長の江崎だけである。その江崎はわか白髪のまじった頭をこち

らに向けて、先程から外国漫画の飜訳にうちこんでいた。四コマのサラリーマン物で、みじかい英語のセリフを同様にみじかい日本語におきかえる。原語のニュアンスにぴったりする日本語が見つかって、満足のゆく訳がつくと、そっと口のなかでつぶやいてから、頬骨のとびでた黄色い顔にしわをよせて、渋い、笑ともつかぬ微笑をうかべるのだった。まだ老成するにはほどとおい四十代だというのに、江崎はいつもオブラートなしでセンブリをなめたような苦い顔をしていて、笑いをみせるのは快心の漫画の訳ができたときぐらいであった。酒が呑めなくて、甘いもの好きの編集長は、センブリが常備薬でもあったのである。

「ねえ編集長、杉田さんがアミダをやろうと言うんですけど」

「アミダ？　なにを買うんだね」

「アップルパイか苺のショートケーキ……」

「ぜいたくだな、少し」

「そんなら大福でもいいですわ」

と、映子はじわじわと初期の目的に誘導していった。

「さっき、アルバイトの稿料が入ったんじゃございませんか？」

「見ていたのか、きみ」

「大福だと百円買えば充分ですわ」

「しようがない、買ってきな。ついでにガスに薬鑵をのせてってくれよ」

財布から百円札を三枚とりだして、それを机の上になげた。

「大福ばかりじゃ曲がない。手頃なやつをまぜてな」
「いって来ますわ」
「お映ちゃん、おれが湯をわかしとくよ」
杉田も立ち上って、薬鑵のほうに手をのばしかけたが、指先がくろく汚れていることに気づいて、あわてて引っこめた。
「不潔な手！」
「洗ってくるよ。大福よりも芋のほうが喰いたいのじゃねえのかい」
にくまれぐちを叩く杉田の鼻の先で、扉が音をたてて閉じられた。
杉田は洗面所で手をあらい、薬鑵に水をいれて、ガスコンロにのせた。疵だらけに凹んだ銅の薬鑵は、この部屋の前の住人がおいていったもので、噂にきくところでは、前の住人はさらにその先代の住人からひきついだということだった。編集部のなかでは、化けそうな薬鑵だといわれている。
杉田が机にもどると、江崎がゲルベゾルテの平たい函をほうってよこした。
「めずらしいですな」
「学生の頃はよく吸ったよ」
「学生の身分でですか」
「やすかったのだ。時代がよかった。いや、そうも言えないな。その頃いやに感じのわるい文部大臣があらわれてね。パパだとかママだとか言ってはいけないの、大学生が日中からマージャン

をやってはいけないのと、うるさく干渉したもんだ」
「戦前にも、マージャン屋へ入りびたる学生がいたのですか」
楕円形の切り口をとんとんと机にたたきつけながら、杉田はふしぎそうに反問した。
「いたさ。なんのために大学に入ったのか判らないというやつがいくらもいた。いまも昔もおんなじさ。はっぱをかけられた刑事が、学校の近くの食堂でライスカレーを喰っていた学生までブタ箱になげこんでね、学生が抗議をしたりした。彼等はこれを学生狩りと称していたんだがね」
江崎は机に両肘をついて、手の甲にあごをのせ、その頃の学園生活を語っていった。白髪のあたまが、ものを言うたびにひょこひょこと動いた。
かるい味のドイツタバコをくゆらしながら、杉田は、半白髪の編集長の顔のなかに、わかき学生時代の面影を想像することに困難を感じていた。
ドアがあいて、もち菓子のつつみを持った映子が帰ってきた。片手に二、三枚の夕刊をかかえている。
「やあ、済まんね」
「編集長のお好きな豆大福をまぜてきましたわ。はい、これ夕刊。あたしのサービス」
「じゃ、おれがお茶のサービスをするか」
杉田ものっそり立って、三人の湯呑みを盆にのせると、水道の蛇口の下にもってゆき、栓をひねった。
「杉田さん、お湯がわいたわ、ガスの栓をとめて」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongb